

2017年4月1日发行 零售：每份2.00元 邮发：每月14.00元 定价：每季42.00元 全年126.00元

# 春燈

2017 April

4月号



主宰の句

安立公彦

一握の豆闇に打ち振り向かず

老々のこころ弾みや日脚伸ぶ

上総路や笹鳴君を送るかに  
(悼・中嶋昌子さん)

四季巡りいま白梅の永晃忌

流れ江の波も茜の二月かな



成瀬櫻桃子の句

ノイシュヴァンシュタイン城五月の空に童話めく

「俳壇」平成十三年

五月晴れの或る日先生はドイツのロマンチック街道を走る車窓にノイシュヴァンシュタイン城を御覧になった。その時お嬢さんと一緒に御覧になった絵本のお姫様やお城を想い出されたのでしよう。

東京ティズニールランドのシンデレラ城はノイシュヴァンシュタイン城を真似たと聞いた事がある。

温かい父性愛を感じる一句と読ませて頂いた。

永島雅子

成瀬櫻桃子の句

雛あられ亡き娘に供ふ減りもせず

「春燈」平成十四年

逆縁で亡くなられた愛娘美菜子さんに雛あられを供えられた。美菜子さんの好物であつたらう。へ不具の掌の受けてこぼしぬ雛あられの句も詠まれている。

掲句の眼目は「減りもせず」である。「さ、雛あられだよ。お食べ」が当然それは口にはされない。悲しいとは言っておられないが「減りもせず」は、先生が吐露された究極の悲しみの表現なのである。

藤丸 誠 旨

# 燈下集



○ 菅澤陽子

霜柱はかなき綺羅を惜しみけり  
春寒の写経の筆をほぐしけり  
心経に多き無と空梅白し  
はやばやと咲き初む熱海桜かな  
うかれ猫鈴音小さく朝帰り

○ 白神知恵子

太箸やお食初てふ嬰もゐて  
竹とんぼに小首傾ぐる初雀  
舞戻ることもめでたき賀状かな  
神木の薪をどざりとどんどかな  
よく笑ふ人らみな去に隙間風

○ 長谷川歌子

決めしことゆらぐ日のあり新日記  
冬菊やうから減りたる齋の膳  
建国日幾代みつめし埴輪の目  
伐らるる木冬芽のいのち確かなる  
行けぬ地の地図を辿るや春隣

○ 佐々木良玄

大寒の星に近づく死の病  
病院の窓に触れ知る寒さかな  
冴返る隣も眠れぬ四人部屋  
今日一輪そして明日も散る椿かな  
年老いて何と淋しき寒の雨

○ 金山雅江

天辺を鳥にわたしてゐる冬木

セーターほどき己が身を丸くせり

詣で来て戴きしもの福と風邪

家康の城を時之初雀

春隣手尺で計る機械工

○ 太田佳代子

やはらかくそよぐ強さの冬葦（樟・中嶋昌子さん）

川のごと地を流れゆく枯木影

悴むや言葉通りに受けとめて

洗顔の泡こまやかに冬の果

春立ちてルーチンひとつ増やしけり

○ 久保久子

寒禽や白一色の北近江

くれなゐの夕日追ひ込む比叡風

光陰や忌日のつづく寒土用

大寒の服の茶の深みかな

打菓子のおぼそとくづれて冬深し

○ 廖運藩

神迎ふ先祖代々の土竈

初鶏の呼応忙しき峡の邑

初鶏の砂に羽搏てる名乗りかな

初鶏を夢現に聴く不眠症

外つ国に初鶏を聴く里心

○ 久米憲子

傍らに薬缶たぎらせ飾壳

夫の名も入れて太箸並べけり

注連縄のつなぐ絆や夫婦岩

寄席ばやし耳に初春浮き立ちぬ

たたみ皺伸ばし春待つ心かな

○ 小倉陶女

新巻の修羅場くぐりし面構

啼きかはし口裏あはす寒鴉

煮崩れの魚の粗や冬深む

大寒や喉にはりつく粉薬

春隣少し自分を甘やかす

○ 荒井 慈

金星に息かかる距離春小袖

人待ち顔のターザンロープ四日かな

寒梅や夫の支へのあらばこそ

娘の摘める百一歳の薺爪

片髭の猫のまじろむ春隣

○ 佐渡谷 秀一

階の猫に日当たたる初詣

餅の儼削る一日の無聊かな

七草粥片仮名の菜を加へけり

思ひきり書類を捨つる寒さかな

寒明の卓よりのぼる埃かな

○ 横田 初美

寒明くを待つ杖の音確かなり(髪を見舞う)

誉められて泣いて見せたる子猫かな

春もはや雀降り立つ手水鉢

梅ほつほつ遠回りして送らるる

人絶えて松の風聴く針供養

○ 宮田 豊子

雪解空心自由に遊ばせて

もうそこに居ぬ人に告ぐ春来ると

臘夜は何かの気配窓開くる

寒戻る歩幅小さく息詰めて

臘梅の黄色に香り人誘ふ

○ 佐々木 新

逝く年の斯くも巨星の相次ぎて

きららきら阿寒湖あかね初日さす

初場所はテレビ棧敷に腹這ひで

啼き交はず丹頂の群れ息白し

通学路白息の列子等の列

○ 呉 秀文

神の留守おれおれ詐欺に嵌りけり

去年今年鬼籍に入りし友の数

小正月至福の時の厨かな

鮫鱈の面に似合はぬ美味さかな

豆まきの嬋天下に福来る

# 当月集

安立 公彦選



○ 荒井ハルエ

初春の帯締め固く結びけり

参道の百の菰樽淑気満つ

受けてすぐ破魔矢の鈴を鳴らしけり

読初や新書を飾る帯の金

繭玉のひとつひとつの重さかな

○ 永井恵子

臆病な犬吠え止まず女正月

農機具の描く細畝日脚伸ぶ

生みたての卵といひて寒見舞

とくと見ん明日咲く苔紅椿

卓の椿夜の閑けさに落ちにけり

○ 中澤弘

節分やレコード盤の薄埃

ボレロ聴く音色ラヴェルの春隣

初午や割烹池畔訪ふ夢見

マチネーや猫には猫の恋敵

臘梅や郵便受けの学会誌

○ 持田信子

初不動一期一会の会釈かな

蒼天へうすき紅刷く寒ざくら

水門に吹寄せられし浮寝鳥

去りがたし冬の河原に迷ひ猫

臘梅の香の包みたる寺領かな

○ 佐藤玲子

生きてゐるか呷生きてゐる初電話

掲示板空つぼのまま寒に入る

婆われの秘密基地めく霜柱

回り道久方ぶりの鳥総松

利根沼田大雪警報中の訃や

# 春燈の句

安立 公彦選

凍裂のこの道何処へ連れてゆく

福島 物江 康平

初日の出待てず朗々牛の声

ふくれ餅さむや小じわの己が貌

雪搔くや心の糧の萌黄色

雲追うて葦の穂絮の飛びゆくよ

竜の玉箒にまろぶ瑠璃の色

流木の燃る匂や浜焚火

数へ日や二白ほどの米浸す

三日生れの老いしと写し絵の父母笑ふ

人日や独り芝居の幕あきぬ

初茜ひそと脈打つ枯木かな

初場所や日出づる国の横綱生れ

日矢落ちてひとつ白帆の日向ぼこ

ともしたる窓を見てゐる雪たるま

動物園人間ばかり着ふくれて

神奈川 宮崎 洋

ハチ公とだまつて春を待ちにけり

うす紅のお下がりにいたたく小正月

風花や捨つると決めし本広ぐ

浮寝鳥吹きをさまりて毬の如

水餅やわれにもありし食べ盛り

何時も来る鳩に混じりて初雀

初富士を遥かに望む江戸往還

気に入りの寒鰯選ぶ船着場

枸橘の花のこぼるる札所かな

去年今年夫婦の仲は変りなし

常楽会師逝き給ひし日なりけり

大試験母は安堵に寝込みをり

宿場町の菜の花そふる菜飯かな

雪籠る羽後の山並湯治宿

初午や甘く煮染めし稻荷鮓

千葉 木村みどり



千葉 廣瀬 克子

東京 佐藤まさ子

神奈川 河本由紀子

# 余言

安立公彦

春深し波音はわが子守唄

大嶋 洋子

この「波音」は海原の波の打ち寄せる音。海辺や広ひろとした湖面を連想する。

この句、「波音はわが子守唄」が全てを物語る。多分海辺に近い住まいだったのだろう。寄する波の、岸辺や岩壁を打つ響きは、長い間聞き馴れていると、いつしか生活の一部となる。夜に入るとそれはあたかも天然の子守唄の相を為すのだ。「春深し」が更なる効果を示す。この句を讀んで首肯する人は多いだろう。

野を焼いて日暮の空を見てみたり

鈴木 鳳来

野焼は早春の風物詩の最たる心のである。曾て見たことのある阿蘇の野焼は忘れられない風物だった。

この句、さして広くはない「野」だろう。その野原の枯葉を焼く作者。枯草も茂っていると火の勢いは強い。慣れない人には用心が要る。作者は既に野焼は充分に経験して

いるのだ。それは「日暮の空を見てみたり」に現れている。この普段の所作の表現あつて、この句は充足した作品とみられている。作者の思いが遍く推測出来る句だ。

正月に少し離れて座りけり

近藤 牧男

この句の初見は新年大会の俳句会だった。一見、「正月に」、もつと詰めると、その「に」に視線が止まり動かない。「に」を、は、を、としてみても言葉として不充分だ。結局、「正月に」と原句のまま解釈した。この上五は俳句特有の省略によるもの。上五と中七の間にその省略がある。それは句を読む人それぞれの感性によるものだ。

そういう思いでこの句を見直すと、当初感じた不自然さが失せていることに気付いた。俳句の表現は奥深い。

安らげき国に在る幸初御空

尾野奈津子

全くその通り。私たちが句会に集うその時も、世界の彼方此方では戦火が絶えない。この稿を案じている今も、新聞には、数日前の某国の首長の兄じや人の暗殺が報じられている。「安らげき国に在る幸」を、多くの人は考えることなく暮らしているのではなからうか。世界は個別に存在するものではない。全て海流により結ばれている。

作者はいま晴れ上がった元旦の空を仰ぎ、身の幸を感謝している。大事なことは、その感謝の思いである。

もうそこに居ぬ人に告ぐ春来ると 宮田 豊子

この「人」は作者のご夫君か。「もうそこに居ぬ人に告ぐ」は、亡き夫君への報告の型をとっているが、それは愛情の対話である。「居ぬ人」とあるが、作者にとつて夫君は常に身ほとりに「居る人」なのだ。

「春来ると」は作者にとつても待ちかねた思いだ。その思いを、身ほとりに居る亡き人に語る作者。作者にとつてこういう所作は日常の中で繰返されているのだろう。この句を見る人に、新鮮な思いを感じさせる作品である。

天職と思ふ幸せ初仕事

大文字孝一

この句の初見も新年大会に於てだった。文句なく選に戴いた。作者は決して若くはない。後期高齢者のチームに、数年したら参加する齢だ。しかしこの前向きな姿勢はみごとだ。「天職と思ふ幸せ」とあるが、もとより全てが天職でないことは当然のこと。それを含めてこの「幸せ」は、まさに珠玉の思いと言つべきである。

「初仕事」という季語が、それを幸とする思いと共に、此の後も長く作品を生み、鑑賞される事を願うばかりだ。

七十三粒数へて供ふ年の豆

藤丸 誠旨

追儺の行事は、今も神社仏閣で催されている。成田山新勝寺の節分の日は、今年是新横綱の稀勢の里が、白鵬とともに年男を勤めた。堂々たる恰幅の両横綱の風格は、歴史ある新勝寺の堂宇と恰好の、文字通り一幅の画だった。

この句、「妻の齢」の前書が付く。作者の奥さんが逝かれたのは二年前だった。夫人の死の直前、作者も大病の手術を、信州大学の病院で受けたと聞いた。以降、節分の当日は、夫人の「妻の齢」の年の豆を霊前に供える作者。夫婦愛という言葉葉を、改めて感じさせる句である。

寒梅一枝白磁の壺に閑子の忌

齋藤 晴夫

河野閑子さんの逝去は、昭和六十年一月十三日だった。前日の十二日が春葉句会の日で、閑子さんもお出された。振り返ると当日の出席者の大方が故人となっていて、現在も健在なのは、完爾、玲子、公彦の三人のみ。翠草朝、閑子さんの急逝を聞く。電話口の緋佐子さんの声は朦朧として乱れていた。後で考えると句会の際の閑子さんは元気がなく、二次会にも寄らずに帰った。

この句、「白磁の壺」が閑子さんを彷彿とさせる。「寒梅一枝」も佳い。今年は閑子さんの三十三回忌だ。